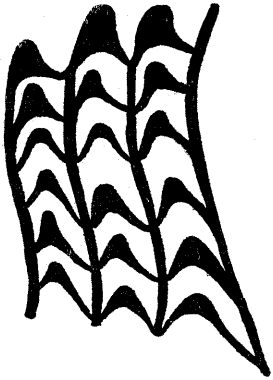
★倉橋賞受賞論文★

イギリスにおいて絵本はどのように発達してきたか

三宅興子



はじめに

絵本が、幼児の生活に欠くことのできないものであるという認識は、『幼稚園教育指導書（一般編）』をみるまでもなく、なんとはなく一般化してきており、保育園、幼稚園、児童図書館などでは、その選択に困るほどの多様さをみせ、また、年々、多量に出版されてきているのが実状である。その反面、なぜ、絵本が必要なのか、幼児の発達とどうかかわるのか、どのように導入するのか、といった根本的な問いかけには体験的な、あるいは、子どもが喜ぶからという結果論的な解答しか得られないのも、実状であろう。そして、「絵本は遊びの世界、楽しみの世界なのである。学問の対象にはならないし、しないほうがいいのである。」（「ひろば」第六十号）という日本の絵本界を絶えずリードしてこられた武市八十雄氏のような声もきこえる。

しかし、真の学問には人間にとってもっとも重要なものとして当然遊びや楽しみの研究が含まれてい

るし、含まれるべきでもある。絵本という媒体には、文学、美術、教育、技術、児童観などの側面に、理論、歴史、実践をそれぞれ重ね合わせて考察していける学際研究が成立する可能があって、学問として未知の分野であるだけに、それだけ、興味もつきないように思われる。そこで、原資料が入手しやすく、今日の概念で絵本という定義にはまるものを出版して百年以上の歴史をもっているイギリスに焦点をあてて、どのようにして絵本が成立してきたのかさぐってみることにした、ささやかな、絵本研究への第一歩である。

一、大人の文化・子どもの文化が未分化の時代

絵本の歴史をどこからはじめるかということでは、例えば、日本の絵巻物『鳥獣戯画』を最古の絵本として、アメリカの学者がとりあげていたりする。しかし、絵本を印刷による複製芸術と考えている者には、その見解では無理である。イギリスという狭い地域に限ってみると、やはり、チャップ・ブックスあたりからというのが順当であろう。

チャップ・ブックスとは、十七世紀の後半から十九世紀にかけて、もっとも普及していた小型本（八、十六ページが多い）であり、出版のさかんであった十八世紀のものは、そのほとんどが、教育を受ける機会のなかった庶民の大人を対象として、一ペニー、半ペニーのような安価に売られたものである。十八世紀末になると、他の印刷物週刊誌などに押され、衰退していくが、十九世紀に入っても、子ども向けに出版されたものは、洗練され、色彩刷りも加わって質が向上していった。

チャップ・ブックスがイギリス全域にわたって普及した背景には、本を読むという行為が、社会のかなりの階層にわたって個人体験として成立する教育制度の発達と、印刷術の進歩にともなって出版業が企業として成立しはじめたことがあげられる。十七世紀末には、チャリティー・スクールとよばれる教会に付設された読み書きと、教義問答を教える簡易な学校が各地にできていたのである。企業として（といっても家内工業ではあるが）出版業を成功させた人としては、ウィリアム・ダイシー William Dicey が有名である。彼はエリザベス朝の小話をあつめたものや、バラッドの一枚ものを発展させ、チャップ・ブックスにつきものの多数の主人公たちを創み出していったのであった。地方出版も盛んで、バンバリーの J・G・ラッシャー Rusher やヨークの J・ケンドリュー Kendrew などは、十九世紀に入って子ども向きの小

型本を次々と出版している。一般民衆を対象とした消耗品的な性格をもっていたのでその全容をつかむことは、かなり困難であるが、木版による挿絵がついていること、内容が多岐にわたっていること、6×4インチ（十九世紀には、それよ小型の3・5×2・4インチ）という小型本であることなどの特徴がある。

内容があらゆる分野にわっているので、その中で特に子どもの読者によく読まれ、今日の絵本のような役割をはたしていたであろうと思われるものにしぼって分類してみると、まず、昔話や中世のロマンスに題をとったものがあげられる。教訓や教科書的なものが幅をきかせていたなかで、十九世紀中葉の創作児童文学の底辺をなし、物語のおもしろさ、楽しさを伝えてきたものとして、チャップ・ブックスの意義づけには必ず、引きあいに出されるのである。「巨人殺しのジャック」「親指トム」、グリムやペローの再話、「ウォリックのガイ」「バレンタインとオースン」など、非常に種類が多いのである。また、名作の再話（「ロビンソン・クルーソー」「ガリバー旅行記」など）も多かった。

第二には、伝説や歴史に題材をとったもので〝ロビンフッド〟ものはもっとも人気が高かった。聖人の伝記や史実を簡単な物語にしたものなどがある。

第三には、幽霊話や占いの本で、特に、土地土地に残る幽霊にまつわる話はくり返し出版されている。第四は、笑い話で、「ゴータムの賢人」や「さかさま」などのナンセンスは、子どもたちに繰り返しよまれたものであろう。また、なぞなぞ類も数多い。

第五には、宗教書である。初期のものには、啓蒙的なパンフレットのようなものが多いが、日曜学校派といわれる人たちが抬頭してからは、内容的に粗雑なチャップ・ブックスは非難をあび、子ども向きに〝良心的〟な（したがっておもしろさにかける）ものが出版された。最後に、教科書的な役割をはたしたものがあげられる。十八世紀末になって子ども向けのものが分化してくるにつれ、ＡＢＣ絵本や、国語読本などが数多く出版された。

これらすべてには、稚拙であっても魅力のあるさし絵がついていて、絵本と同じ働きを持っているし、子どもの文学の中で大きい位置を占めている伝承文学を本という形の中に定着させていった功績は大きいものがある。

また、大人のために仕事をしたが、結果的に子どもの読者がつき、絵本の成立に大きい役割をはたした二人の画家についても触れておきたい。

トマス・ビーウィック Thomas Bewick（一七五三～一八二八）は、一七七〇年代に版画に新しい手法を工夫した技術革新の面と、さし絵にイギリスの田園や自然を描いて今日でもよく使われ

る消耗品ではない独創的なカットを残している点で著名である。そのビーウィックが二十歳前後に、子どもの本づくりをやっている。粗雑でやっつけ仕事の多かったチャップ・ブックスのなかで、例えば『幼な子のための鳥と獣の本』*New Lottery Book of Birds and Beasts for Children to Learn Their Letters By As Soon As They Can Speak*（一七七一）は、左ページに文字、右ページには上に小鳥、下に動物がかかれ、それぞれふち飾りの模様でかこまれている百ページをこえる小型本であって、絵本と図鑑の二つの役割をもつ革新的なものであった。

ジョージ・クリックシャンク George Cruikshank（一七九二～一八七八）は、技法的に、トマス・ビーウィックの伝統を受け継ぎ、ホーガスにはじまったイギリス庶民の風俗を描く諷刺画家として多数の作品を残しているが、その厖大な作品群の中に、子ども向きのものが多々みられ、絵本とさし絵入り本の未分化の時代の画家として絵本史の上で高い評価が与えられている。十二歳よりプロとして働いており、その無名時代には、チャップ・ブックスを多数制作しているが確認するのは困難がある。今日も複製されているものとしては『コミック・アルファベット』（一八三六）が著名であり、一場面ずつの動きがあり、ドラマが語られていて、おかしさと、内に秘めたグロテスクさが、並のＡＢＣ絵本とは違った味を出している。

二、子どもの本屋さん――ニューベリーとハリス――

十八世紀の子どもの本を語るとき、必らずあがってくる人物に出版人ジョン・ニューベリー John Newbery（一七一三～六七）がいる。ニューベリーが出版した本は、彼の出版業全体の約四分の一、百二十五冊であるが、その値段は、六ペンスないしは、一シリングと、労働者階級には高すぎるが、中産階級の下層にはかろうじて手の届く値段であり、一ペンスであったチャップ・ブックスが消耗品的であったのと比し、高級なものもマーケットとして成立することを実証した、代表作とされる。『小さくて、かわいい小型本』*A Little Pretty Pocket-Book*（一七四四）は、九〇ページ、さしえ五十八葉が入っており、内容も子どもの遊びを四行詩としてＡＢＣ順に並べて、教訓をつけたもの、イソップ寓話四篇、トムとポリーへの日常の教え、四季のこと四十六篇の格言集ともりだくさんである。ニューベリーは子どもにとって必要なものは、健全な道徳や知恵であり、興味をひきながら教えようとする意図をはっきりさせており、さし絵も本文も独創性に乏しく、当時のものを集大成したもので、その水準を知るのに、資料とし

て貴重である。

また、ニューベリーの本にあらわれた主人公、たとえば、ジャイルズ・ジンジャーブレッドや〝くつこつちゃん〟をみても、一貫して精励努力して六頭立ての馬車にのるような身分になれる少年と、その隣りに坐る婦人となる少女が、理想像として描かれており、保守的な児童観、文学性の乏しさで、時代をつきぬけるものとはならなかったが、当時のものとしては、教訓臭が少なく遊びを重視したことは評価される。

ニューベリーの出版業をひきついだ、ジョン・ハリス John Harris（一七五六～一八四六）は、ニューベリーのかげにあって充分には研究されていないが、新しいアイディアを商売に成功させることでは、遜色なく、メタル・プレートによる印刷、手彩色のものを同時発売など、画期的な業績を残している。

ハリスの出版したもの（常時二百冊以上がカタログにみられる）のなかで、もっとも著名なものは、一八〇七年の『ちょうちょうの舞踏会』*The Butterfly's Ball and the Grasshopper's Feast* である。絵本という意識や概念がまだはっきりしていなかった時代にあって、時代の要求に合致し、生み出された、いわゆる創作絵本といえるものであったからである。タイトル・ページには、作者の名前も画家の名前もあがっていないが、作者が名士でありかなりのことがわかっている。原文が「ジェントルマンズ・マガジン」一八〇六年十一月号に掲載されているのである。テキストにつかわれた詩の作者、ウィリアム・ロスコー William Roscoe（一七五三～一八三一）は末息子ロバートの誕生祝いとして即興的に詩をつくったが、それがもとになっており、詩は息子だけではなく、まわりの人々にも愛され、作曲されたりもしていたのだ。その全く教訓臭のない、楽しい詩に目をとめたハリスは、ただちに絵本にした、初版は何部刷られたか記録が残っていないが、その年の終りまでに二万部を売りつくし、メタルプレートがすりきれてしまい、その翌年には、全く版をかえて出版されたのである。（初版では、昆虫が擬人化されて描かれ、さしえの比重が高いのにくらべ、再版では、ロスコーの詩をそのまま省略なく使っており、絵の比重が少なくなっている。）いろんな動物が次々とパーティにやってきて、踊ったり、食事をしたりして楽しい一夜を過ごすというストーリーは、一つのパターンとなり、ただちに模倣作を生んでいき、直接の影響を数えられるものだけでも二十数篇はあげられるが、パターンとしては今日も同じ系列のものが出版されているのである。

ハリスのカタログを見ても、子どもを喜ばせるためにだけつくられたものは数少い。読んでもらう絵本の働きを考えるとき、読

者によびかけるところからはじまり、いつのまにか昆虫たちのパーティに連れこまれ、最後に夜になって家に帰るという構成は、幼児の心理にうけ入れられやすく、続々と模倣作を生んだゆえんでもある。また動物が主人公であって、いろんな動物を楽しむことができるということでも、子どもと動物との深い結がりを考えるとき動物絵本の一つの時代を拓いたものともいいうる。一八六〇年代まで版を重ね、一八七〇年にはアメリカ版も出るというロングセラーとなったのである。

三、絵本の成立とエドモンド・エバンズ

絵本の歴史の上で、一八六〇～八〇年代は画期的な時代であった。手彩色しかなかったさし絵の世界に色刷が入り、印刷の発達とともに、今日われわれが「絵本」といっている独自のジャンルが確立した時代だからである。

いうまでもなく、絵本が成立するには、絵本画家、出版者、読者が必要であり、商品として複数で（多量に）売られるものである。エドモンド・エヴァンズ Edmund Evans（一八二六～一九〇五）は、木口木版の印刷技術のすぐれた職人として、色刷りの絵本を飛躍的に発達させ、今日でも通ずる三人の絵本画家ウォルター・クレーン Walter Crane（一八四五～一九一五）、ランドルフ・カルデコット Randolph Caldecott（一八四六～八六）、ケイト・グリナウェイ Kate Greenaway（一八四六～一九〇一）を世に出した。見方によれば、画家よりも、それを複製する仕事の方がより重要な時代でもあった。エヴァンズは、一八四七年に独立し、生涯を画家の絵を印刷する職人として過した。五二年に、三色刷り（茶・青・黄）でスタートしたのは、安価であり、早くでき、また色が鮮明であって出版社の要求と合致したからであったが、一八五六年七年より、ジョージ・ルートレッジ社と関係ができてからは七色刷り、または、それ以上の多色刷りを手がけ、多様な画家とのコンビによって腕にみがきがかかった。六一年には、タイトル・ページに名前が出るようになっていった。いいものをつくれば、多少高価であっても必らず読者がついてきてくれるという考えが確立していき、一八六五年に、〝トイ・ブックス〟の仕事によって、ウォルター・クレーンとの出会いがあり、この分野で後世にも名前が残ることとなった。同業者の娘であったグリナウェイ、新しい才能を求めていて、さし絵入り新聞や雑誌の仕事より、じっくり落着いた仕事をやりたがっていたカルデコットの発見があり、三人三様の相異る才能を生かして、それぞれに魅力をもつ絵本をつくり、現在も版を重ねている事実を考えると

き、エヴァンズのはたした役割は大きい。しかし、彼の『回想録』をよんでみても、これといった絵本観をもっていたのではなく、色刷りの技術の発達した当時にあって、もっとも、力量を発揮できる場をみつけたわけであった。

当時、粗末で品の悪い絵本の中で、もしよいデザインの、芸術的な美しい絵本があれば、民衆の支持がえられるという考えを出版社に説く一方画家を物色していたエヴァンズの目にとまったのが、著名な肖像画家の子どもとして生まれ、若くして画家として出発したばかりのウォルター・クレーンであった。一八六五年、二十歳で『鉄道のＡＢＣ』*The Railroad Alphabet* をはじめてとして、十年位の間に、確認されているだけで約四〇冊の絵本を出している。版権はなく、画家名も年代も明記されていない絵本のシリーズであったが、何度も版をあらため、繰り返し出版された。サイズとページ数はすべて同じで、四枚の紙に片面だけ印刷し、表紙と一ページ目と最後のページを糊づけして貼りあわせ、三枚は半折してはさみ、閉じてある。『六ペンスの歌をうたおう』*Sing a Song of Sixpence* など、わらべ歌の絵本では、一枚一枚の絵に動きがあって人物の表情もたくみであり自由に描かれた線が美しい。ＡＢＣ絵本では、その装飾的なデザインと構図に秀れている。それにくらべ、物語絵本では、一枚一枚の絵はすぐれているにしても、ストーリーと絵の関連が不自然で流れがなく充分に成功していない。クレーンの代表作は、『赤ちゃんのオペラ』*The Baby's Opera*（一八七七）、『赤ちゃんの花束』*The Baby's Bouquet*（一八七八）、『赤ちゃんのイソップ』*The Baby's Own Aesop*（一八八六）の三部作である。ほぼ四角い本に、黒をふちどりに使ってあと一色か二色で飾り、三番目に、一ページの多色刷りが入った五十六ページからなる五シリングの本であった。高すぎて危険だというまわりの反対を押しきって発売したところすぐ一万部を売り切り、エヴァンズの自信を深めた作品となった。クレーンの仕事全体からすると絵本製作はほんの初期のものにすぎないにしろ、一作ずつ、手を抜かず製作した良心とその芸術的に絶えず向上していこうとする実験心が、絵本を芸術といえるものにしていったのである。

ランドルフ・カルデコットの場合は、アービングの『スケッチ・ブック』にさし絵をつけ、『オールドクリスマス』（一八七五）というタイトルで出版されたものが、クレーンが忙しくなり、その後継者を探していたエヴァンズの目にとまったのである。その絵のユーモアと独創性によって人気の多かったカルデコットであるが、病身であることもあって、〆切に追われるあわただしいジャーナリズムの仕事よりも、落着いた仕事を求めていた。一八七

八年より毎年二冊のペースでコンビを組んだが、八十五年に十六冊目を出版したところで健康がすぐれず、翌年、病没している。カルデコットは、イギリスの新聞、雑誌のさし絵が写真にとってかわられる直前の高い水準、単色刷りから多色刷りへの移行期、農業から工業化の過渡期という時代にあって、風景画と人物画というイギリス美術の伝統を新しいメディアである絵本として結晶させたのである。十六冊は、わらべ歌、古歌、バラッドなどをテキストとして、大量に（初版一万部）、安価に（色刷り一ページにペン画三ページの構成をとった）、出版された。一冊ずつが絵に、流動感の動きがあり、ユーモアにあふれ、細部に発見があり、動物や自然描写にすぐれ、画面と文字の配置を工夫し、その中で遊べるユニークな世界をつくっている。

ケイト・グリナウェイの場合は、父親が同業者として、娘の絵を知人エヴァンズに見せたところ、エヴァンズは画の独創性にうたれ、ただちに、全ページ多色刷りの絵本をはじめてつくるという冒険にふみきった。『窓の下』*Under the Window*（一八七八）である。絵も詩もケイトによる創作絵本であった。初版を思い切りよく、二万部として六シリングと高価であったが、すぐ売り切れ、七万部増刷、フランスやドイツに三万部輸出という大ベストセラーとなった。国際絵本のはしりでもあった。

花々、果物のなっている樹、庭園、牧草地などを背景に、帽子をかぶり、四角くカットされたハイ・ウェストのすその長い古風な服装の子どもたちが、歩いたり、遊んだり、飛んだりはねたりしている、ケイトの絵本（あと十冊ばかり残っている。）に共通する世界は、当時ですら、古き良き時代だと思わせるものであった。ビクトリア時代の繁栄の中にあって、一見、明るく楽しげなはずの子どもたちを、思いつめたような悲しげで真剣な顔つきに描き出したケイトの内面については、知る資料がないので推察するほかないが、種々の矛盾があふれて出した時代の反映として、守るべきもの、彼女のユートピアの主張のように思われる。ケイトの絵ほど、これも国際的模倣者を多数生み出した例はないが、その中にあって、はっきりこれは、ケイトとわかる独自性は、得がたく、現在も愛しつづけられている。ジョン・ラスキン John Ruskin（一八一九～一九〇〇）が一八八三年、オックスフォード大学の講義において、彼女の絵本の魅力を分析し支持したこともあって、書簡を交換しあい、助言をえて一作、一作と、工夫をこらし、絵本の可能性をひろげていった。

四、二十世紀

その後の絵本の発達は目覚ましく、プロの画家だけではなく、そこにいる子どものためにつくられた〝手づくりの絵本〟なども加わり、ますます多様になっていった。

十九世紀からの伝統をうけつぎ、それを、発展させた二十世紀のはじめ活躍した画家としてレスリー・ブルック Leslie Brooke（一八六二～一九四〇）があげられる。ブルックは、昔話絵本、わらべ歌絵本、創作絵本をつくったが、この三つの群は十九世紀の絵本の代表的な分類と共通しているのである。ブルックの代表作『カラスのジョニーの庭』*Johnny Crow's Garden*（一九〇三）は、『ちょうちょうの舞踊会』のパターンをとり、そのユーモアにおいて、カルデコットを継承している。彼の独想的なところは、文字にないストーリーが絵によって語られているところで、絵本というジャンルの一つの完成をみたものといえるかと思う。

ブルック以降については稿をあらためることにするが、以上のように、イギリスの絵本は、その時代の要求と、人々のくらしや経済的基盤をもとにし、技術の革新によって、新しい芸術家を育て、過去のものを、踏台にして、発達してきたのである。そして単に子どもを喜ばすメディアとしてだけではなく、画家が、多数の民衆にその芸術をわかちあうことのできるものとして、幼児向きというわくをひろげ、チャップ・ブックスとは、質・量とも に相異するとしても万人のものとして、注目を浴びはじめてきている。

なぜ、絵本なのかという問いかけは、ますますその必要度をましているように思われる。

（大谷女子短期大学）

付記

この稿は、日本保育学会より、第二十五回倉橋賞をいただきましたことを機会に、過去九回にわたり発表いたしました「イギリス絵本成立史研究」を、整理し、編年体にまとめたものです。

訂正とお詫び

表紙題字比田井和子氏の氏名を、一月号目次で誤まって日田井和子と印刷されました。一部訂正洩れの地域がありましたことを、謹しんでお詫びするとともに訂正致します。

編集部